

「技」を磨く

科学技術都市の構築に当たっては、創出された「知」を活用しその成果を実へと育て上げる「技」を磨き上げなければならない。

「技」の主役は企業であり、世界に通用する中核企業をはじめ、新しい技術やアイデアの芽を育てるベンチャー企業や、ものづくりの基盤となる高度な技術力を有したり、既存技術から新たな技術や分野へ活用及び応用したりする中小企業の存在が不可欠となる。国際競争や地域間競争が激化している中、持続的な発展を図るためには、産業科学技術の振興を支える多様な企業群の活躍が必要となる。そのため、意欲あふれるベンチャー・中小企業への支援とそれを支える人材の育成に取り組んでいく。

また、知識社会における「ものづくり」へと比重を移している中、世界を見据えたものづくりとして、知的財産の戦略的な創造や活用が図れるよう、国、府、産業支援機関等と連携した取組を進めていく。

ベンチャー・中小企業の支援

① ベンチャー企業等の事業化促進

科学技術都市の構築に当たっては、大学等の研究成果を産業界へ円滑に移転し、技術革新や新事業創出につなげていくことが必要となる。このためには、大学や研究機関の研究成果を広く収集し、これらを活用したベンチャー企業等の共同研究の推進と研究成果の円滑な事業化が求められている。

このため、「京都市ベンチャー企業目利き委員会」については、これまでの取組実績を踏まえつつ、より効果的にベンチャー企業の発掘及び育成が図られるよう、今後の方策等について建設的な議論を深めていく。

また、科学技術に精通し、大学等の研究成果と企業ニーズの結合、異業種連携等を行うコーディネート機能を一層高めていくほか、産学公連携の下、京都市地域プラットフォーム事業の発展的な展開等を通じて研究開発から事業化まで一貫した支援体制の構築を図っていく。

② ものづくりを支える中小企業の技術力向上への支援

科学技術都市の構築に当たっては、卓越したものづくりを支える技術力が必要であり、中核企業のほか、絶え間なく技術力向上に努力している中小企業の存在が不可欠である。

このため、ものづくりの根底を支えている基盤となる技術の向上をはじめ、自ら有している優れた技術を活用した新たな展開など、中小企業の技術力向上に向けて、京都市産業技術研究所をはじめとする支援機関や大学等が連携して、取り組んでいく。

人材の育成

① 実践的な取組を志向した起業家等の養成

起業家精神に富み、創造的な事業活動に取り組むベンチャー・中小企業は、次代を担う新事業創出の駆動力であり、今後の経済発展の担い手である。こうしたベンチャー・中小企業を育成するため、実践的な起業家の養成を実施する。

また、科学技術都市の構築に当たっては、志の高い起業家のみならず多様な人材を必要とする。このため、「ものづくり都市・京都」の将来を担う若者の育成を目的とし、市立工業高校での抜本的学科改編を実施し、中でも伏見工業高校でのデュアルシステムの導入や、全国初となる総合養護学校版デュアルシステムの実施等により、高度で実践的な技術を身に付けるほか、確かな職業観や勤労観、課題解決能力の育成に取り組む。また、平成19年1月に開所する「京都市スチューデントシティ・ファイナンスパーク」での体験学習等を通して、個々人の能力が最大限発揮できるよう、小・中学校、高等学校や大学をはじめ様々な機会を通じて産学公連携の下、総合的な人材育成を図っていく。

用語解説

デュアルシステム

企業と教育機関が連携し、長期実習等により人材を育てていく教育プログラムをいう。

② 社会から信頼を得るための人材の育成

ベンチャー・中小企業が成長していくためには、国際的な競争に耐え得る経営基盤を確立するとともに、地域に貢献する健全な経営倫理や道徳観を確立しなければならない。とりわけ、企業活動が経済的側面のみならず社会的側面まで多角的に影響を及ぼしている中、企業の信頼と誇りが求められており、法令順守はもとより、企業の社会的責任（CSR）という形で重要視されてきている。

このため、社会と共に歩み、社会から共感が寄せられるベンチャー・中小企業となるよう、セミナー等の開催を通じて、市民社会の規律を備え、心と人の優しさに価値を置く人材育成を図っていく。

Column スチューデントシティ・ファイナンスパーク事業

京都市では、産学公連携の下、市民ぐるみの取組により、小・中学生が現実の生活により近い環境の中で、実際の活動を通して社会の仕組みや経済の動きを学び、望ましい職業観や勤労観を育むための体験学習施設を元滋野中学校の校舎を活用し、開設します。（平成19年1月予定）

● スチューデントシティ（小学生を対象）

施設の中に銀行、商店、新聞社、区役所等からなる「街」を再現。その「街」で、消費者役と会社員役、それぞれの立場での役割を体験し、社会や経済の仕組み、社会との関わりなどを理解します。

● ファイナンスパーク（中学生を対象）

施設の中に再現した「街」で、税金・保険をはじめ食費や光熱水費、教育費など生活に必要な費用の試算、さまざまな商品やサービスの購入・契約などを体験。社会にあふれる情報を適切に活用する力や自らの生き方につながる生活設計能力などを育成します。

③ 製造現場で中核となる人材の育成

ものづくりはひとつづくりと言われるが、団塊の世代の大量定年退職など、ものづくりの層が急激に衰える懸念がある。専門知識を基礎にシステム開発等に応用する技術者や熟練した技をものづくりに生かす技能者など、製造現場のものづくりや伝統的な匠たくみの技を支える人材の確保や育成、そしてこのような人材の意欲を高めていくことが重要である。

このため、技術の高度化や短寿命化、熟練技術者の高齢化が進む中、ものづくりの競争力を支える現場の「技術力」の維持発展を図るため、京都市産業技術研究所のほか、経済団体などの産学公連携による製造現場の中核となる人材の育成を支援する。とりわけ、大学は、地域にとっての知的・人的資源であるとともに、地域再生の重要な担い手であることから、大学を核とした現場での教育を取り込んだ実践的な人材育成を支援する。

また、児童・生徒がものづくりを学ぶ機会の提供や、ものづくりを教えることができる教師の育成支援を図る「京都こどもモノづくり塾」(仮称)をはじめ、伝統産業における匠たくみの技を持つ「ものづくり名人」ともいえる技術者の存在を社会に周知し、未来を担う子供たちにもものづくりのすばらしさを知ってもらい、ものづくり体験等を通して次世代のひとつづくりをしていく。

Column 伝統産業後継者の育成 ～みやこ技塾～

工業技術センターと繊維技術センターでは、西陣織、染織、陶磁器、釉薬、漆工などの幅広い分野で優秀な技術者を育成するため、研修・講習会「みやこ技塾」を開催しています。これまで延べ1万2千人余りが受講し、多くの方が第一線で活躍されています。

- 今回多くの業種の方が集い、色々初めて知る事も多く良かったと思います。こういった機会を与えていただき、感謝致します。
- 分業制により着物を仕上げていく大切さが分かりました。一つ一つにとっても細かい技術が求められており、伝統工芸としても途絶えることなく、現代まで続いてきた理由を何となく感じることができました。

～ 卒業生のコメント ～



繊維技術センター
「本友禅染(手描)技術者研修」

知的財産の活用

京都市知的財産戦略の策定

競争力のある地域経済を育成していくうえでは、研究成果を特許権などの知的財産として、戦略的に保護し、活用していくことが重要である。

平成 14 年には「知的財産基本法」が制定され、地方公共団体についても、知的財産の創造、保護及び活用に関し、国との適切な役割分担を踏まえて、地域の特性を生かした自主的な施策を策定し実施する責務を有するとされた。

このため、本市においても「京都市知的財産戦略」を策定するとともに、知的財産に関する相談や、人材育成、情報提供など効果的な体制を構築するため、近畿経済産業局が中心となり整備された「近畿知財戦略本部」をはじめ、府や(社)発明協会京都支部等との関係機関と連携し、地域のベンチャー・中小企業が知的財産を経営資源として戦略的に活用できる環境づくりを進めていく。

とりわけ知的財産は、活用されてはじめてその価値を発揮するものであるが、地域の企業、大学等が所有している特許の多くは未利用となっている。このため、科学技術都市を構築するため知的財産が効果的に活用されるよう、知的財産の活用の目的に応じた価値の評価や円滑な流通の促進等について研究を進めていく。